神社と鎮守の森がずっとそこにある事の意味

持続可能な緑のまちづくり

藤田直子

谷中の諏方神社は「おすわさま」と呼ばれる日暮里から谷中にかけての鎮守さま。
提供：ピクスタ

東京・府中市の大國魂神社の馬場大門のケヤキ並木。
提供：ピクスタ

神社には鎮守の森がある

最近いつ、神社の事を考えただろうか。暮らしのなかで意識していなくても身近に存在するもの、それが神社である。

実は日本には約8万社も神社がある。この数はコンビニの店舗数よりも多い。東京ではさすがにコンビニの数が上回っているが、それでも1,800社以上の神社が存在している。では、神社にあって寺にないもの、それは何か。鳥居や狛犬などもそうだが、他にも大事な違いがある。それは「みどり」である。

日本には大小さまざまな神社が数多く存在し、豊かな樹林を有する鎮守の森によって守られている。そして、その多くは地域の風土に根ざした植生や自然形態を残しており、祭りをはじめとする地域文化の継承にも役立ってきた。ところが、90年代の終わり頃から年間約150ヘクタール余りの神社地が消失していく状況に陥った時代があった。その原因は、不動産収入を得るという目的で、神社の敷地の一部を駐車場や宅地に転用する場合や、自治体等の要請に応じて道路や公共施設の用地として提供した事によるものである。しかし、神社そのものを無くしてしまおうという選択は殆ど見られなかった。その理由は、日本人が持つ神社の神様や、その土地そのものに対する畏敬の念によるものである。

土地を読んでこその緑地計画

江戸時代の人々は、神社にさまざまなメッセージを込めた。それは自分達の地域の大切な場所である事を示していた。いわば神社や鎮守の森は、江戸時代以前の人々と現代に生きる私達を結ぶメッセンジャーなのである。私達はそのメッセージを読み取り、現代の都市生活を支える基盤として活かしていく「土地を読む」センスを身につけなければならない。

近年、空間配置やネットワーク概念によって都市緑地を捉えようとする動きが活発化している。このようなアプローチは、従来の都市緑地の分析・評価に対して行われてきた緑被率や面積による判定では評価されない部分に対して価値を与えることを可能とした。また、元来見逃されてきた緑地の潜在性を明らかにすることも可能であるため、今後の緑地計画上大きな意義があると考えられる。

このような視点で緑地の特徴を理解し、都市緑地計画上に位置づけるためには、それらが各々の価値観に応じて配置されてきたことを理解し、それらの分布の特徴を把握する必要がある。その際、緑地を画一的に取り扱うのではなく、文化や歴史を培う基盤であり、実際の空間と歴史性や場所性との間に連動性があることを理解した上で、各々の配置されている特徴を空間的に理解する視点が重要である。神社の立地は凝集性を持たず全域にわたってランダムに分布しながら、寺院や公園に比べて地形との結びつきが強く、集塊性を持たず局所的な分布の偏りが無く、どの地域にも存在している。同じように、寺や都市公園もそれぞれ異なった立地特性を有している。

このように、立地特性が異なる緑地の特徴を活かしてそれらをつなげていけば、これまで認識されていなかった新たな都市緑地デザインを生み出すことができるのではないだろうか。

神社の立地が秘める「神社力」

市街化が進行した都市部では、鎮守の森は貴重な緑地だといえる。例えば生物多様性の保全に貢献する景観デザインを考える際、地域の過去の自然植生や配置がどのような状態だったのかを知ることが出来れば、デザインに時間と空間の厚みを持たせることができる。また、どこにどのような樹木を配置すれば社寺林と公園などの緑地をうまくつなげてビオトープネットワークを構築出来るのかを考える時にも、神社の立地の歴史を知り、それを活用するのが望ましいだろう。

都心に巨大な緑地を提供する明治神宮と代々木公園。
明治神宮に通じる表参道の並木は、東京らしさを代表するランドスケープの形成に寄与している。
提供：ピクスタ

また近年、地震などの自然災害に対応するレジリエンス機能の強化の重要性が指摘されている。私は神社の立地に着目した「神社力」というコンセプトを新たにつくり、科学的にその立証を試みている。多くの場合、神社は地域の中でも標高が高い場所、湧水がある場所、かつて災害が起こった場所など、地形の変曲点や自然条件の影響を受けやすい場所に立地している。そのため、歴史的な経緯を知ることで、防災拠点として利用するための評価も可能となる。都市防災として神社の価値を考えてみると、一時避難場所としての空間的有用性だけでなく、過去の災害の記憶と記録を後世に伝える場としての時間的有用性も兼ね備えていることが分かる。これからの緑のまちづくりには、歴史に学びながら自然災害から人々の命を守るための環境デザインが求められるだろう。このように、神社が有するさまざまな価値を理解し地域計画に活かすことで、持続可能な緑のまちづくりの展開が期待できる。

都市の神社の立地特性や歴史性や地域における存在理由などを考えていくと、先人達が経験的に選択してきた立地の必然性に敬意を払い、そこから学び、それを活かしていく姿勢が必要だと気付かされる。これからの緑のまちづくりには、自然を克服する環境デザインではなく、自然に寄り添うデザインを積極的に取り入れ、社会に実装していく方向性が求められているのである。

江戸城の鎮守として知られる東京・永田町にある日枝神社の鳥居と参道脇の緑地。
提供：ピクスタ

藤田直子
［ふじた・なおこ］
筑波大学芸術系教授

東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻博士課程修了。博士（環境学）学位取得。東京大学大学院農学生命科学研究科リサーチフェロー、（独）国立環境研究所NIESポスドクフェロー、（独）森林総合研究所特別研究員、九州大学大学院 芸術工学研究院 環境デザイン部門 准教授を経て、2019年4月より現職。ランドスケープエコロジーを専門とする。